

風を起こす <第18回>

趣味で始めた女子ボクシングで
世界のチャンピオンベルトを獲得

岡山市北区役所税務課

池山 直さん

7月27日、ロンドンオリンピックが幕を開ける。男子マラソンの日本代表選出にあたっては、公務員ランナーが世間の大きな注目を集めたが、それ以前に、公務員ボクサーと称された女性がいる。女子プロボクシング選手・池山直さん。現役の岡山市職員でありながら、リングの上では世界王者に輝いている。

きれいなパンチが打てるようになりたい

「通勤途中に見つけたんだけど、市内にボクシングジムができたみたいよ!」——池山さんがボクシングを始めたきっかけは、職場の友人との何気ない会話だった。健康のために何かスポーツを始めたいと思ってたけど、スポーツクラブじゃつまらないし、ボクシングだったらちよつと変わっていて面白いかも。そう思った池山さんは早速、友人を誘って見学に訪れた。

初めて足を踏み入れたボクシングジム。

立ち込める熱気の中で、サンドバックを打つ人、トレーナー相手にミット打ちする人、黙々と縄跳びをする人。各々が真剣な表情で練習に打ち込んでいる。

「ミット打ってみるか?」ジムの会長に促され、グローブをつけてみる。「片手でガードしながら、打つんだ」言われたとおりにパンチをすると、「パシッ!!」とミットが鳴った。その音に池山さんは一瞬、心を奪われた。中学ではバスケットボール、高校では柔道、大学のサークルではバレーボールやテニスをやってきたが、ミットを打つ感触はこれまでにあじわったことがない。もつ

「仕事で外出した際、市民の方から“新聞に載ってた人だね”と声を掛けられることもあります」と池山さん

[いけやま なお]

1969年、岡山県生まれ。1988年、岡山市役所入庁。住民課、市民病院、市民税課、スポーツ振興課、市民企画総務課、資産税課を経て現職。2001年より健康のために始めたボクシングで頭角を現し、2003年プロライセンス取得後、デビュー。2006年、日本ミニフライ級王座決定戦で王座獲得。2007年、WIBA世界ミニマム級王座決定戦で王者となった。





ボクシングジムでスパークリングをする池山さん（写真右）。
「本番で繰り出されるパンチは、練習を積み重ねた結果でしかありません」

とやってみて！」そう思った池山さんは、ボクシングジムへの入会を決めた。

ジムでは週に1〜2回行われるボクシング教室に参加できるほか、ジムが開いている時間ならいつでも好きな時に自主トレーニングができる。ジャブ、ストレート、フック、アッパー…基本の動きをミットを打ちながら身につけていく。「パシッ!!」「ピシッ!!」「バシッ!!」何度かパンチを打つうちに、池山さんは当たり方によって音が異なることに

気づいた。当たり方が良いと良い音がするが、悪ければ音も悪いのだ。

「パンチがきれいに打てると自分でもすごく満足できるし、感触が残るんです。その感触をあじわいたいと思ったのが、ボクシングにはまつていった理由です」

プロライセンス取得後4年で 世界チャンピオンに

池山さんのトレーニングは月曜から土曜までの週6日。仕事でどんなに疲れていても、足は自然とボクシングジムに向いた。

「朝起きて歯を磨く、顔を洗うことと同じように、ボクシングジムに通うのが日常生活の一部になっていました」

メキメキと腕を上げた池山さんは、ボクシングを始めて2年後の2003年にプロライセンスを取得。アマチュアライセンスでもよかったのだが、年齢制限に引っかかったため、プロライセンスを選ばざるを得なかった。

ライセンス取得から3カ月後には、初めて試合のリングに立った。対戦相手も同じデビュー戦で長身のサウスポー。身長152センチの池山さんにとってはやりにくい相手だったが、2分4ラウンドを制し、見事白星を飾ることができた。だが正直、試合中のことはあまり覚えていない。

「とにかく無我夢中でしたから」
試合後にビデオを見て大きなミスに気づ

いた。青コーナリーの選手だったにもかかわらず、赤コーナリーから入場していたのだ。リングサイドで待っていたトレーナーはさぞかし焦ったことだろうが、池山さん自身は自分の間違いにも気づかないほど緊張していた。

快勝のデビュー以来、年3回程度のペースでリングに立った。リングに立てるかどうかは、対戦相手が見つかるかどうかによる。対戦相手が見つければ、すぐさま試合に向けたトレーニングを開始する。対戦相手はどう攻めて、どう闘うか、トレーナーが考えてくれた作戦と練習方法にしたがって、ひたすらトレーニングに打ち込む。時間は普段と同じでも、練習メニューは完全に試合向け。

試合前の減量については、まず、すべての間食を一切止め、一日3食だけにする。これでかなり体重は落ちるが、それでも落ちない時にはご飯の量を減らす。

「ただ、私はご飯を食べないとリングで動けなくなるので、そのあたりの調整が難しいです」

池山さんの得意技は右フック。ハードパンチャーとして恐れられる。

「試合の時は、相手を倒すというより、相手のパンチを見ることに集中しています。それをよけながら、自分がどう打つかを考えています。とは言っても、試合ではトレーニングで身体に染みついたものしか出てきませんから、相手のパンチをよけた段階で、打つべきパンチは自然に出てきます」



「日本ミニフライ級タイトルマッチ」でリングに立つ池山さん。試合に出る以上、勝ちにこだわって闘う

試合とトレーニングを積み重ねた結果、2006年4月の日本ミニフライ級王座決定戦では、8回TKOで王座を獲得した。TKOとは、テクニカルノックアウトのこと、レフリーが試合続行不可能と判断して試合が止められる。つまり、池山さんは圧倒的な力で勝利したのだ。

同年の10月には初防衛にも成功。さらに、翌年11月にはWIBA世界ミニマム級王座決定戦で、最軽量級の華と呼ばれたハンガリーの強豪選手を相手に10ラウンド判定勝ちを収め、王者に輝いた。

38歳で再びプロライセンス取得

ここで少し、女子ボクシングについて説明しよう。

ボクシングというと男のスポーツという印象が強いが、女子ボクシングも意外と歴史が古い。欧米では18世紀〜19世紀頃から既に行われていたという。

日本では、1996年に第一回全日

本アマチュアボクシング大会が開催され、1999年には日本女子ボクシング協会（JWBC）が結成された。

プロボクシングの世界では、1国1コミッションが大原則となっている。すなわち、試合を統括する団体は1国に1つしか認められていない。女子プロボクシングについて、日本ではJWBCがコミッションであり、唯一、世界戦を行える団体だった。しかし、2007年に財団法人日本ボクシングコミッション（JBC）が女子の試合も認めたことから、国内のコミッションはJBCに一本化された。

これに伴って、世界タイトルに挑戦する選手たちは新たなプロライセンス取得が必要になった。JBCのプロライセンス取得は原則32歳までだが、世界ランカーだった池山さんは38歳という年齢ながら特例で受験を認められ合格した。加えて、世界タイトルに挑戦するには、JBCに加盟しているボクシングジムの所属選手でなければならぬ。池山さんはそれまで所属していた岡山市内のボクシングジムから、香川県にあるJBC加盟のボクシングジムへの移籍を余儀なくされた。

「それでも、ボクシングを辞めるという選択は考えられませんでした」

ファイトマネーに代わるモチベーション

プロボクシング選手にとってファイトマネー

も大きなモチベーションとなるはずだが、池山さんは公務員ゆえにファイトマネーを受け取っていない。

女子とさえども、ボクシングにケガはつきもの。

「生傷は絶えないし、顔が腫れ上がることもしょっちゅうです。鼻が折れて病院に行った時は、飛び上がるほど痛かった」

どれほど痛い思いをしても、池山さんは相手にひるむことなく向かっていく。

「私にとって一番のモチベーションは、応援してくれる人の期待を裏切りたくないという気持ちです。実は、デビューして3戦目に負けた時、すごくつらい思いをしました。皆お金を払って見に来てくれたのに、すごく申し訳ない。それが苦しくて苦しくて…。そういう気持ちを一度あじわったからこそ、強くなれたんだと思います。私にとっては、殴られることより負けて期待を裏切ることのほうが怖いんです」

勝敗を分けるものは何かを問うと、「折れない心」ときっぱり。

「最後の1分1秒まであきらめずに手を出し続けられる気持ちの強さが、勝敗の分け目。どれほど技術を持っていたとしても、途中であきらめてしまったら、そこで負けてしまいます。ボクシングには根競べ的な部分があります。ボクシングの会長いわく、男子の選手に比べ女子の選手のほうがあきらめないそうです」



WIBAミニマム級タイトルマッチでの世界王者獲得後、後援会のメンバーたちが祝勝会を開いてくれた。池山さんにとって、仲間たちの応援が対戦相手に向かうエネルギーになっている

仕事とボクシングが相互に好影響

リングでは闘魂みなぎる池山さんだが、取材でお会いした時は、もの静かで、クレバーな人という印象を受けた。丁寧な言葉を選ぶ落ち着いた話し方は、世界王者のボクシング選手のイメージとは大きくかけ離れていた。

取材を行ったのは役所閑庁後。この時間帯を指定されたことに「公私をはっきり分けた」という池山さんの強い意志を感じた。「自分の中で、仕事とボクシングはきっちり分けています。ボクシングは、あくまでもプライベートです」

男子ボクシングと違って、マイナースポーツの女子ボクシングはファイトマネーも少なく、ボクシング一本で生計を立てることは難しいのが現状。多くの選手が本業を持ちながら、あるいはボクシングをメインにアルバイトで稼ぎながらリングに立っている。

「私は、仕事を言い訳にボクシングで負けたくありません。逆に、仕事があるからこそ、ボクシングを続けられているのかもしれない」

そうは言っても、試合前などもっと練習時間が欲しいと思ったりはしないのだろうか？

「限られた時間だからこそ、練習も濃い内容でできるんです。時間をかけてダラダラやるよりも、集中してやったほうが断然身

つきます。それに何より、ボクシングのトレーニングはハードですから、そんなに長時間はできませんよ」

プロボクサーとしてデビューした当初、職場の上司から言われたことがある——「ボクシングをしているからと言って、甘えるなよ」

「もったもな意見だと思いました。だから、仕事中は当然仕事に集中しますし、それが終わったらトレーニングに集中します。ボクシングやっているから仕事を怠けているんじゃないか、なんて思われたくありませんから」

リングの上でボロボロになっても、池山さんは翌日、普段と変わりなく役所で仕事に励む。

女子ボクシング界で「日本人世界王者」に名を連ねる池山さんは、「公務員ボクサー」と称されることもある。しかし、当初はマスコミの取材を受けても「私が公務員ということは書かないでください」とお願いするほどナーバスになっていた。

公務員でありながらプロボクサーとしてリングに立つこと、女子でありながらボクシングで闘うことについては賛否両論あるようで、インターネット上では批判的な書き込みや心ない言葉も散見される。

ボクシングをすることを、池山さんは両親からも反対されていた。そんな両親が、たった一度だけ試合を見に来てくれたことがある。2007年のWIBA世界ミニマム級王座決定戦。池山さんが初めて世界王者

に輝いた日だった。女の子が拳を交えて闘うなど両親にとっては理解しがたいことだったかもしれないが、その声援は池山さんにとって最大のパワーになったに違いない。

もう一度、世界のチャンピオンベルトを！

池山さんの目の下の目標は「JBCの世界タイトルに挑戦し、チャンピオンベルトを獲得すること」。JBCの規定では、最後の試合から2年間リングに立たなければライセンスは失効する。だが、2010年12月以降、JBCが認める試合に出ない。試合に出るといっても、そこへたどり着くまでにいくつかのハードルがある。対戦相手が見つかるか、興行として成り立つか、さらに所属するボクシングジムの事情など、選手本人にはどうにもできない要因が絡んでくる。

「自分の中で、挑戦したい気持ちがある反面、あきらめる気持ちもあります。身体がついていけるかという問題もありますし」

スタミナを維持し、勘を鈍らせないために現在もトレーニングを続けているが、その量は減っている。ライセンスの期限切れまで残り半年。リングの上で自らの限界に挑む池山さんを見たいと願うのは、私だけではないだろう。

(協会職員／篠田良子)